

神戸高校

「ともことサマーキャンプ」

2018. 12. 24 上演4

この劇は、現在のいじめ問題について深く考えさせられる物語だった。いじめをしていた生徒だけではなく、生徒の親にもスポットライトを当てているこの物語は、クラスメイトのともこが亡くなったところから始まる。後に、ともこの遺書が学校に届き、親たちは娘を庇おうと言い争いを始めていく。

舞台美術は舞台上に本当に教室があるように感じさせるものだった。教室の壁が舞台全体に広がっており、木で出来た椅子が置かれていた。窓は半透明ですりガラスのようになっており、人が通ると見えるようになっていて、脚本に合わせた不気味な演出をしやすいようになっていた。また、椅子の配置によってカーストや人間関係、距離感が分かりやすく表現されていた。

最初、幕が上がった際は陽気な音楽で皆が楽しく仲の良い雰囲気や動きをしていたが、後半に行くにつれて暗く陰湿な雰囲気になっていく。キャスト一人一人の表情や動きが細かく、その場の緊張感などがよく伝わってきた。また、生徒役のキャストはその生徒の親を一人二役で演じていた。衣装は女子の制服のままだったが、生徒と親の違いが仕草や姿勢、立ち姿などではっきりと演じ分けられており、生徒側を演じているのか、親側を演じているのかがとても分かりやすかった。また、子供のキャストが自身の親を兼ねて演じることで誰がどの子の親かが分かりやすいという意見もあがった。

場面転換の際に、完全に暗転させるのではなく、透けて見える窓から青い照明を覗かせ、不気味な音響を流すことで、恐怖や不快感を抱かせていた。また、ともこの母親が登場する直前の場面転換の際に、暗闇の中で窓の外に女の子のシルエットがうつり、ともこが歩いているように見えるシーンがあり、それが不気味さを倍増させているように感じた。

最後の「でも、私たちは生きなあかん」という台詞には、いじめを無かったことにして早くこの話を終わらせようとしている加害者の気持ちを感じたという意見や、他人の人生を踏み台にしてでもちゃんとした生活をしたくないと思っているのではないかという意見があった。また、役者が客席に向かって演じることで、まるで自分がともこになっていじめっ子に喋りかけられているように感じられたという意見も多数あった。

表では自分の子供を守ろうとしているが、実は自分の身を守ろうとしている親や、いじめをしておきながら他人事のようにのうのうと生きている加害者の姿に、人間の醜さや汚さ、同調圧力の恐ろしさを感じ取ることができた。